

日本黒部学会の活動を通した 黒部学の構築と普及

日本黒部学会 会長 森丘 實

はじめに

本会は1989年に黒部川と歴史に学び、新しい地域学を確立し、川とともに暮らすために少しでも役に立つ情報交換のために黒部川流域の下流に形成された臨海扇状地に結成されました。設立以来、毎年研究例会を開催し、見学会・巡検等を随時実施してきました。これらの学会活動や会員の研究成果を研究紀要「黒部」として、第11号まで発行しています。これに掲載された研究論文は約10年間で70題に達し、黒部川流域に関わる歴史、地理、地質、水質、動植物等の広い分野におよぶ貴重なデータ・ベースとなっています。また、流域内外の人たちと共に黒部川のことについて考えるために、これまで6回の黒部川シンポジウムを開催してきました。これらの講師やパネラーは広く人材を求め、世界の河川と対比するなど、川と人々の関わりを理解し、流域の自然システムと社会システムのより良い融合を目指して活動を行っています。これらのシンポジウムの報告はその都度、研究紀要に特集として発表されています。

地域学と黒部学会のあゆみ

黒部川は峡谷と扇状地の二つの部分から成っています。下流の扇状地において住民は古くから洪水との闘いをくり返し、家屋や農耕地の保全に努めてきました。上流の峡谷部では、昭和の初期から電源開発が進められ、日本の水力エネルギー供給の一大拠点となりました。それに伴って数多くの貯水ダムが造られ、水と土砂の流れが変わり、扇状地の様相も大きく変わってきました。

このような二つの異なった部分が相互に影響し合っていて黒部川流域特有の文化を生み出しています。しかし、文化は社会基盤の変化と人々の生活様式の変化とともに変化するものであり、現在、流域の環境保全と防災の問題の高まりとともに新たな

地域の暮らし方が模索されています。

このような状況の中で、本学会は地域研究を積極的に進め、黒部学という地域総合学を構築して、それが今後の川と地域住民との関わり方や地域の文化を考える上での基礎となることを目指しています。また、黒部学の構築は、研究者と地域住民が一体となって進められるべきであり、そのために研究紀要やシンポジウムを通して情報の交流と普及を図り、地域の人々の川に対する関心を高めることにも留意されています。

(1) 研究紀要「黒部」の刊行(配布部数：500)

平成2年の第1号にはじまり、12年の第11号に至っています。その主な内容としては、まず黒部川の地質・地形・気象気候や治水・用水の歴史、扇状地の地下水や湧水、流域の動植物等に関する研究論文の掲載があげられます。その他、過去6回にわたって開催された「黒部川シンポジウム」の内容が整理されて、その要約が掲載されています。特に第10号は、10年間にわたる学会活動の総括の意味をもつ記念号であり、100題に近い研究論文・講演・提言等の題目が整理されて一覧として掲載されています。さらに10年間の活動全般に対する総括がなされ、今後の学会活動についての展望が示されています。

(2) 黒部川シンポジウムの開催

過去6回の黒部川シンポジウムとその概要は下記の通りです。

平成3年9月 第1回黒部川シンポジウム

(共催：黒部市)

テーマ「黒部川の素顔を探る」(参加：230名)

平成4年9月 第2回黒部川シンポジウム

(共催：黒部市)

日本黒部学会の活動を通じた黒部学の構築と普及

日本黒部学会 会長 森丘 實

テーマ「黒部川を拓いた先人に学ぶ」

(参加：170名)

平成6年10月 第3回黒部川シンポジウム

(共催：黒部市)

テーマ「黒部川に学び黒部川に抱かれたまちづくりをめざして」 (参加：325名)

平成8年10月 第4回黒部川シンポジウム

(共催：黒部市)

テーマ「黒部川再発見 - その実像と表現 - 」

(参加：200名)

平成9年10月 第5回黒部川シンポジウム

(共催：黒部市、建設省黒部工事事務所)

テーマ「黒部川の将来を探る - 世界の河川との比較から - 」 (参加：150名)

平成13年10月 第6回黒部川シンポジウム

(共催：黒部市)

テーマ「黒部川の水と土砂 - 山から海への石ころの旅 - 」 (参加：80名)

・特別展 - 山から海への石ころの旅 - 共催：黒部市吉田科学館 (9月29日～11月11日)



第三回黒部川シンポジウムの様子を伝える新聞報道

(3) 見学会・研修会

本学会では、会員による学会活動を活発にするために、研究部会・普及部会・資料部会・編集部会の四部会を設け、活動を行っています。当初、会員はいずれかの部会に所属し、全員参加を目指していましたが、必ずしも初期の目的を達成していませんが、研究例会、見学会、巡検などを実施してきました。それらの主なものは以下の通りです。

黒部峡谷コース、黒部川扇状地と河岸段丘コース：平成2年8月22日～23日

黒部川扇状地の扇頂周辺野外観察会：平成2年10月14日

薬師岳巡検：平成3年8月21日～23日

黒部川左岸埋没遺跡と幻の十二貫用水の見学：平成4年9月26日

愛本堰堤・宇奈月ダム見学：平成6年10月8日

黒部川下流野外観察：平成7年5月7日

7月豪雨と黒部川の河床変化：平成7年10月29日

池ノ平・仙人池巡検：平成8年8月3日～4日

大井川見学：平成8年10月21日～23日

黒部川上流 小黒部崩壊地、黒部川下流(用水)見学：平成9年10月4日

宇奈月ダム見学、黒部川の石ころの観察：平成14年10月8日

第6回黒部川シンポジウム開催!



平成13年10月7日、黒部市吉田のYKK国際会議場において第6回黒部川シンポジウムが行われました。日本黒部学会と黒部市吉田科学館の共催によるもので、平成3年から過去5回のシンポジウムを重ねてきています。今回は視点を「黒部川の峡谷溪流—臨海扇状地の成り立ち—」にしぼり、シンポジウムのテーマを『黒部川の水と土砂』とし、水と土砂に関する話題提供として、基調報告とパネルディスカッションが行われました。関係者約80人が聴講に訪れ、知識を深めました。

基調報告では、京都大学防災研究所助教授の澤田豊明氏が「山から海への石ころの旅」をテーマに講演され、続いて地元の郷土史研究家の吉田祐次氏が「祖先の灌漑用水維持の苦難と合口用水の完成」、京都大学農学研究科助教授の藤田正治氏が「山地河川における土砂動態」について講演をされました。

また、前建設省砂防部長の池谷浩氏をコーディネーターに、当事務所長進藤裕之氏、澤田豊明氏、吉田祐次氏、藤田正治氏を迎えて「山から海への石ころの旅」と称してパネルディスカッションで熱心に討議されました。



澤田助教授の基調講演



パネルディスカッションの様子

日本黒部学会の活動を通じた黒部学の構築と普及

日本黒部学会 会長 森丘 實

シンポジウムに合わせて、黒部市吉田科学館では特別展『山から海への石ころの旅』が開催されています。

特別展とシンポジウムは、「石ころはどこからきたか、そのふるさと、その運ばれ方を見つけるとともに、その石ころの海までの旅を探り、それによって、続いて石ころの旅が土砂礫の働きにどのように関係しているかを考える」ことを目的としています。また、地球上における山から海までの土砂礫の働きと地形の関係を、自分の目で見て、考えることで、逆に地形からそこで生じる土砂礫の働きや、流れを読み取れるようにと構成されています。



吉田科学館特別展「山から海への石ころの旅」



河川に関するビデオ放映



会場のパネル展示の様子



黒部川扇状地

地域学から地域環境科学・社会科学へ

黒部扇状地を空から見ると一面に広がったモザイク模様の水田がきれいに見える。しかし、その水田では耕作者の高齢化と後継者の問題が深刻化している。このようなことは30年ほど前には考えられなかった問題である。先人が大変な苦勞の末に作り上げた農地とそのシステムをどのようにすべきか、食料問題を含めて考えるべき重要課題である。

一方、黒部川では近年、貯水ダムの排砂に関係した河川・海の問題が表面化し、流域住民の河川環境への関心が高まりつつある。このような河川環境問題を考える際、流域を総合的に理解する視点が必要であり、そのアプローチとして、また情報交換の場として、黒部学のような地域学の発展が必要とされている。

近年の気候環境変動等の影響を受け黒部川流域においても水・土砂環境が大きく変わろうとしている。このような変化は、地元の地の利を生かした長期のモニタリングが必要であり、本学会がそのための情報交換の場として貢献が期待されている。

活動の社会への普及

シンポジウムや共同研究を行う際、総合学としての地域学を意識して、自然系・人文系が共同で実施できるテーマを選んでいる。

現地の状況を体験することを重視した見学会を実施している。例えば、建設省の協力を得て、平成7年の大規模な土砂洪水災害の見学会等も行っている。その他、洪水の歴史、用水の歴史などに関して勉強会や見学会を行っている。

黒部川を理解するために、国内外の他の河川との比較を試み、静岡県大井川等への巡検を実施した。また、人口洪水で有名な米国のコロラド川の見学も検討中である。

各シンポジウムをはじめとする学会活動を記録

整理し伝えるため、研究紀要「黒部」や「ニューズレター」を定期的に広く配布している。市の広報などの活用も非常に有益であり、さらにインターネットのホームページの開設も検討している。

黒部市吉田科学館との協力が子供達の川の理解を助けることに役立っている。

小中学生が学校の先生とともに学会の主催する見学会などに参加しやすい内容や方式を検討中している。

おわりに

本学会の活動における今後の課題は、以下のよう

に大別される。
歴史的に見た川と人々の暮らしを明らかにすること、とくに江戸時代の新田開発、用水、人々の団結と秩序、生活の知恵などの歴史資料をよみなおすことによって、これからの社会システムのあり方を考える。

気候・地形・地質などの自然条件の解明などを通じて自然システムの解明を目指す。

将来の地域づくりにおける河川の役割等を具体的に明らかにすることを通じて、現在問題とされてきている河川防災・環境保全に対する答えを引き出すことである。また、地域の人々が理解しやすい表現を用いることによって、子供たちを含めて地域の防災・環境保全について、人間の問題としての理解と行動を支援することが大切である。